



No. 105

発行人 渋谷 茂
発行所・事務局一般社団法人千葉県社会福祉士会
〒260-0026 千葉県千葉市中央区千葉港7-1
ファーストビル千葉みなと3F
TEL 043-238-2866
Fax 043-238-2867
<http://www.cswchiba.com/>
E-mail: office@cschwiba.com

※ 点と線はメール配信でも読めます！

特集 子どもの心を支える～コロナ禍におけるソーシャルワーカーのうごき～



パンドラの箱から飛び出した見えない敵が猛威を振るっている。
社会の仕組みが大きく変わる時に、ついていけずに取り残されてしまう者もある。
でも、私たち福祉職は昔から、見えない物に価値を見つけ、創造して、幸福や安寧を目指すことを生業とし、それを得意としてきた専門職である。
新しい技術や相談援助の方法は進化しても、私たちの考えは昔から変わることはない。
パンドラの箱はまだ閉じていない。私たちの眼もまだ閉じていない。

《 特集 》

- 2 子どもの心を支える～コロナ禍におけるソーシャルワーカーのうごき～
- 6 Zoom 座談会「原点回帰」ソーシャルワークの原点に沿って一年を振り返る
- 8 Zoom インタビュー NGO アドラ 被災地支援
- 10 社会福祉士のわ
- 11 コロナ禍に求められるリーダーとは
こらむ
- 12 事務局便り

特集

子どもの心を支える
「コロナ禍におけるソーシャルワーカーのうごき」

文部科学省が二〇二〇年一〇月二二日に公表した「問題行動、不登校調査」によると、二〇一九年度に病気や経済的状況以外の理由の不登校で小中学校を三〇日以上欠席した児童、生徒は一八一、二七二人で過去最多を更新、前年度より一六、七四人増となった。増加は七年連続、約十万人が九〇日以上欠席した。主な不登校の原因の中「無気力、不安」が最も多く、三二%であった。高校では五〇、一〇〇人で、前年度より二、六二三人減だが横ばいとなっている。また、二〇二〇年一〇月二三日に千葉県から公表された「児童生徒の問題行動、不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」では、千葉県内の公立小中学校、高校の不登校児童、生徒数は、小学校で二、三五二人（前年度比三三

六人増）、中学校で五、一四九人（前年度比四九人増）、高校で二、三八一人（前年度比二七四人減）となっている。

二〇二〇年度は三月から新型コロナウイルスのため約三ヶ月に及ぶ一斉休校期間を経て、マスクの着用やソーシャルディスタンス等の新たな生活習慣を取り入れた学校生活が再開された。日本教職員組合が二〇二〇年八月末から九月中旬にかけ行った調査によると、回答が得られた小中学校、高校、特別支援学校一、〇五二校のうち二二・七%が「不登校や保健室登校などの子供が増えた」と回答している。収束の見えない新型コロナウイルスがもたらす漠然とした社会不安は子どもたちの心にも大きく影響を及ぼしていると言えるだろう。

二〇二一年を迎えてなお、新型コロナウイルスの感染拡大は収束の兆しを見せず更なる長期化が懸念されている。子どもたちの心と生活にも大きな不安と負担がかかることが想像に難くない中、我々ソーシャルワーカーにはどのような役割が期待されているのだろうか。



柏市スクールソーシャルワーカー
三井 正行（みつい まさゆき）

新型コロナウイルスによって学校は一定期間の休業となりました。そんな中影響があったと思われるのが、とりわけひとり親家庭や低所得家庭、また家族関係の不和等元々リスクの高かった家庭です。通常家庭というのは安心安全な場所なのですが、前述したような家庭ではそのような環境が作りづらいこともあり、コロナ禍でそれが表面に出てしまったといえます。

ある児童生徒本人は部活もなく体を動かすことができないストレス、その保護者もひとり親で他に子どもが二人いて、子どもたちも言うことを聞いてくれない等ストレスがたまり、互いにコミュニケ

ーションがスムーズにいきません。そのうち子どもから暴言暴力が出るようになり、学校が再開しても遅刻が多くなり次第に欠席が増えてきている状況です。

そのような中で不安を抱える児童生徒たちにどのような支援ができるのか。心理や病気のことであればスクールカウンセラーや医師に繋げたり、家庭や学校以外の公的な第三の居場所である「学習相談室」に繋ぐこともあります。またどのようにして学ぶ機会を確保するかといった場合、学校へどうしても行けない、また外へ出られないケースのときは、学校から授業のプリントや課題を出してもらったり、eboard（イーボード）とってタブレット等の端末で家で学習できることも紹介します。また間接支援になりますが、行政の担当課に繋げることで、そして親御さんとの面談も有効です。親御さんにも親御さんなりの悩みや不安があり、共感・傾聴することが大切です。親御さん自身も吐き出すことでリフレッシュして子どもと

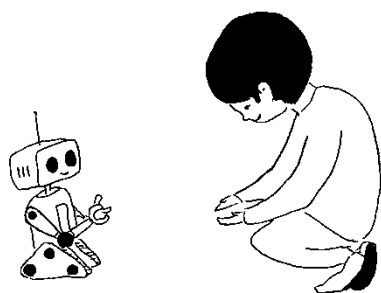
向き合えるようになることができます。

支援は上記のようにいくつか方法がありますが、最後に学校や家庭訪問で最初に児童生徒と会って話をする機会をどのような点で気をつけていくべきかを紹介します。

まず第一には本人の悩みや愚痴、不安を共感して傾聴することです。それはいくら子どもの理屈であつて社会一般的におかしいと思われることであっても「そうだったんだね」「つらい思いをしてきたんだね」と否定しないこと。単純なことですが、人間は話して共感・傾聴してもらい、気持ちを吐き出すことで不安がとて少なくなります。親や学校の先生以外で話ができる大人がいることは、子どもたちにとっては大きいことです。そして第二には本人が希望すれば話した内容は他言しないこと。つまり守秘義務です。学校や先生への不信が不登校の原因の一つである可能性も否定できないため、このことは児童生徒と信頼関係を築くものには重要な要因です。第三には

無理に学校に行かせようとしないうこと。元々ハイリスクの家庭の子どもは自己肯定感が低いことが多いため無理は禁物です。支援の糸が途切れないように、信頼関係を損ねないように本人の意志を尊重して話を進めて、本人の今をありのままに受け止めることが重要だと思えます。

このように児童生徒との最初の出会いを大切にして信頼関係を築き、細くても長く支援を続けていくことが、将来に希望をもたらししてくれると信じています。



【弁護士法人ソーシャルワーカーズ、千葉市児童相談所、ちばアフターケアネットワークステーション（社会福祉士、精神保健福祉士、弁護士、DJ）】

安井 飛鳥（やすい あすか）



「コロナ禍における子ども・若者達との関わりから思うことー子ども・若者達との協同実践を目指してー」

弁護士法人ソーシャルワーカーズの安井飛鳥と申します。僕は、弁護士資格を有するソーシャルワーカーとして弁護士事務所やアフターケア事業所等の職員としても仕事をし色々子どもや若者達と日々、関わっています。

コロナ禍における一斉休校や外

出自による混乱が広がる中で、子どもや若者達の生活への悪影響が心配されました。僕もこの間、延べ二百人以上の子どもや若者達の相談対応に追われました。家庭内での不和、居づらさや家出に関する相談から性被害、予期せぬ妊娠に関する相談、職や家を失ったという生活困窮に関する相談が特に目立ちました。

それでも彼ら彼女らは早期に相談につながる事ができたのだよかったですと思います。相談につながることもできず、『しんどい』思いを抱えながら生活している子どもや若者達のが心配されます。報道でも指摘されているように子どもや若者の自死事例が例年よりも増えているという実感です。

振り返ってみると僕達ソーシャルワーカーは、このコロナ禍の中で子どもや若者達の日常を守るためにどれだけのことができたでしょうか。テレビやインターネットは子どもや若者の不安を煽るようなネガティブ情報に溢れ、大人も

またそうした情報に翻弄され、不安を助長していたようにも思います。大人都合での政策や支援ばかりが議論される中で子どもや若者達の声が置き去りにされてはいなかったでしょうか。いまの子どもや若者達の『しんどい』状況を作り出しているのはコロナではなく僕達大人の側ではないでしょうか。僕達がすべきなのは、子どもや若者達の声を聞き、共にこれからの『楽しい』日常を作り上げていくことではないでしょうか。

一方でこのコロナ禍の中でも少しでも子どもや若者達の日常の『楽しさ』を支えていくための取り組みられました。例えばオンライン通信技術等を活用して子どもや若者達の交流の場を設けると、子どもや若者達もまたそうした環境にいち早く適応し自ら新しい生活の楽しみを見出していく力強さを見せてくれました。このように子どもや若者達は時代や社会の変化にも柔軟に対応していく力を持っています。だからこそ、僕達も

子どもや若者達と一緒に考え、悩み、歩んでいくことが大事だと改めて感じました。

近年、子どもや若者の支援領域においても子どもや若者の意見表明権の保障やアドボカシーが注目されるようになってきました。こうしたアドボカシーを推進していくにあたっては社会福祉士がその専門性を活かしていくことが期待されます。自分は子どもや若者については専門ではないから…と思われるかもしれませんが、だからこそ、まずは一緒に子どもや若者達の声を聞いていくことから始めてみませんか。そこから僕達が子どもや若者達の「いま」を支えていくためにできることはなにかを一緒に考えていければと思います。

現在、千葉県での子どもや若者との協同実践を推進するための団体設立の準備を進めています。ご関心ある方は是非一緒に活動をしていけたらと思いますのでよろしくおねがいします。

【千葉県社会福祉士会(理事・元キヤンパスソーシャルワーカー)】

秦野 隆治(はたの りゅうじ)



「アウエーで活躍しつづける皆さんへのエール」

日々子どもの最善の利益のために職務に励んでいるスクールソーシャルワーカーのみなさまお疲れ様です。今年度担当理事を拝命致しました秦野隆治と申します。日本社会福祉士会では「スクールソーシャルワーク実践ガイドライン」を定め私たちの活動の見える化を図るとともに文科省や総務省に対しても働きかけ(ソーシャルアクション)を強めているところです。千葉県社会福祉士会としてもバックアップ策を検討していきます。児童・生徒を含めた子どもをめ

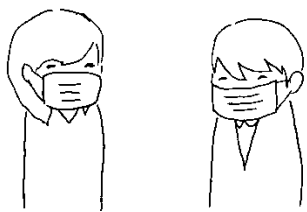
ぐる状況は、どんどん複雑化・深刻化しています。いじめ、不登校、貧困、虐待、ヤングケアラーなど子どもたちの心や生活を苦しめる問題の背景には、ひとり親世帯の増加、地域コミュニティの喪失、非正規雇用の増加など大きな社会構造の変動が横たわっているのは周知のとおりです。国においてもニッポン一億総活躍プランにおいて「ひとり親家庭・多子世帯等自立応援プロジェクト」を立ち上げ、二〇一九年までに全ての中学校区にスクールソーシャルワーカーを配置する、計一万人の雇用目標を掲げ予算措置（十九・七億円）がされました（ただし常勤換算でないことに注意が必要！）。千葉県でも多くのスクールソーシャルワーカーが活躍していらつしやいます。

しかしながら期待とは裏腹、実践現場には厳しい現実があります。私自身は、小中高ではなく、大学という場で社会福祉士として雇用され、学生の貧困、借金、家庭不和、発達障害（グレーゾーン）、ひきこもり、留学生の文化的差異、中退後の進路などの相談援助を行いました。話を傾聴しつつその学生のストレスングスを見出し、家族システムの改善や地域資源の活用を試みる私たちの手法がいかに有効であるかを実感しました。成長期のクライアント（学生）と向き合うに際し、発達心理学の知見をもった心理職（公認心理師等）と協働すると実に大きな力を発揮できました。うつむいて悲嘆にくれ、時に涙を流す彼らがあらためて自分自身の価値や力を確認し、現実によりよく立ち向かっていく起点に立ち会えたと思いました。なにしろ総勢三万人もの学生がいるマンモス校であったので日々クラクラする思いで事にあたりましたが、教員や学生課や教務課の事務職員では対応不可能な深刻な事態が大学でも起こっていることは明らかでした。

ただ真の問題はそこではないと私は感じました。問題を抱えたクライアントに向き合い相談援助するのはある意味やりがいがあり、私たち自身も覚悟を持って対応できます。ですが実際の現場では、実にさまざまな不自由さが横たわっていました。例えば校舎から外にすることも「待った」がかかりました。許可制です。言うまでもなく学校は「教育の場」であり、福祉の場ではありません。学校教育の下、文科省の管轄です。私たちが安易に優しい気持ちで一部の学生・生徒に手を差し伸べると「公平さ」の原則に反することになり批判を浴びます。文化・言語が違うのです。また誰も表立って言葉にはしないのですが、確実に権威のピラミッドがあり、上意下達のシステムには抗えません。つまりアウェーですね。目の前の子どもに向き合うだけでなく、横との関係、時に後ろにも気を使わなければなりません。如何に矛盾とストレスに満ちているか。

先日、現任のスクールソーシャルワーカーの自主勉強会にZoomで出席させていただきました。題名は「子どもたちの最善のために行えること」SSWのアイデンティティとジレンマ」でした。今、まさにスクールソーシャルワーカーの皆様は、目の前の子どもに向き合おうとすればするほど、ジレンマが深まり、自分のアイデンティティを問い直し日々自分を鼓舞しながら働き続けていると思います。

さて、最初に戻って千葉県社会福祉士会としては何ができるでしょうか。実際のスクールソーシャルワーカーの方々の中には、資格のない教職OBの方も非会員の方も多いらつしやいます。まずはそこに垣根を作らず、子どもたちの最善の利益の実現をめざして協力し合える関係作りからなのかもしれません。まずは話を聞かせていただこうと思います。どうぞよろしくお願いします。



TOPIX

Zoom座談会「原点回帰」

この度、広報部会員とその仲間たちでZoom座談会を実施しました。テーマは「原点回帰」。令和二年は、コロナ抜きには語れない一年でした。今は「被災」している状態と認識し、この有事の時だからこそ、ソーシャルワークが求められています。ソーシャルワークの原点に沿ってそれぞれの一年を振り返ってみました。

A氏 自分が新人の頃、介護保険が始まり、措置から契約へと移行し「介護サービスの知識を得て、しっかりと選択肢を情報提供したうえでつなぐ」ということが、ソーシャルワークのスタートだった。高齢者福祉は高齢者の分野の中で、障害者福祉は障がい者の分野の中で、というように分野ごとのネットワークで動くことが多かった。

最近、様々なフィールドの人と

つながり、話す機会が増えている。

コミュニティカフェ等まちづくりを展開している方から「自分たちが今できることは高齢者、障害者、若者など対象限らず、地域で暮らす人に選択肢をたくさん提供すること、それが地域の豊かさにつながる。」と話を聞かせてもらった。高齢、障害者、子ども多分野の担い手が今、地域共生型のまちづくりを展開している。コロナの影響で周囲との関わりが減っている人が多くなっている今、ソーシャルワーカーとしてつながる先を広く持ち、豊かな選択肢を提供できるようにすることを大切にしたい。

I氏 私が仕事を始めた時、利用者を直接支援する現場で働いていると、「ちょっと待ってて」など話を聞けないことにジレンマがあり、「ちゃんと話を聞いてあげたい」というのが自分の中にあったと思う。年明け早々にコロナが騒がれ

始め、こういう時だからこそ「話を聞いてほしい」という人が沢山いたはずなのに、対面で話せない状況になってしまった。施設は、利用者との接触はなるべく避ける方針だった。訪問して、普段言えない心の声を聞くことを行ってきたが、それができなくなった。

今、利用者が求めているのは環境との調整よりも、対話ではないか。そして、直接的なカウンセリングなどを通して個人の変容を目指すアプローチが必要とを感じる。例えば、その人が抱えている課題に対する考え方について、一緒に見方を変えてみるアプローチが求められているのかなと感じる。

O氏 放課後等デイサービスで関わった時の経験ですが、コロナの影響で通うことができない状況の中で、久しぶりに会った利用者さんがよそよそしい反応だった。その時は「照れているのかな？」と思っていたが、後になってその反応は「何故、自分だけがみんなと会うことができないんだろう？」と、それを言えずにいじけていた

ことがわかった。おそらく、「自分が悪いことをしたのではないか。」と思ったかもしれない。「自分だけが制限されている」と思っていることに気づくのに時間がかかった。コロナという被災状況のなかで、

「これからどうなるのか」という説明が難しい中、利用者さんがどう感じているかを意識しながらクライエントと対話すべきと感じた。**S氏** コロナ前も後も変わらないものがあって、誰かが言った言葉なんだけど、「人の相談にのことはソーシャルワーカーでなくてもできるが、ソーシャルワーカーの専門性は、人と制度の間に介入していくこと」。

本人が困っていないくて、そこを支援したい人がいるときに「本人が求めない理由はどこにあるんだろう？」などと制度と本人の間に介入するスタンスは、変わっていない。

ただ、コロナ禍で使えるもの、使えないものが出てきている事実はある。本人の自立を促すというても、次の手立てが見つからない

こともあったりする。考え方としては、その人と制度の間に介入するという、ソーシャルワーカーの専門性は、変わらず意識している。T氏 私が思うのは、人間の柔軟性ってすごいなということだ。ソーシャルワークが変わるわけなくて、コロナって環境があるだけ。人間って、弱くも強くもあって、新たな環境を受入れる力って素晴らしいなと思う。この状況でどのように生きればいいんだろうと、思っている人って、沢山いて。

今、終末期で家族と一緒に過ごしたいという声を本人が言うのが増えている。コロナだからこそ、このまま会えなくなる。ということだと思うが、自分で考えて、決定するチカラを強く感じた。我々のスタンスはアシスト。本人が自分で決めた、それを支えられることが原点だと思う。

Y氏 介護保険のスタート時、新規に介護保険を申請する利用者の担当ケアマネジャーで何年か仕事をしていた。その時にある利用者の介護者が中国地方の出身の方で、

田舎の実家に母親が一人で暮らしている。地元の特養に申し込んだところ入所でき、その特養で生活している。自分は年末年始しか会いにいけない。その方から、「私は半年に一回くらいしか面会にいけないのだけど、久しぶりに面会したら、母親に「ここに居るのはつらいんだよ。」と言われた。家に戻すわけにもいかず、娘としてはつらい立場にある。説得したところ母は、「そんなことはわかってる。施設の職員さんに世話をしてもらったりするときに「ありがとね」「すまないね」と言っている。そういう言葉を言い続けなければいけない。それがつらいのよ。」と言っていた。

利用者のなかには、「ありがとね」と言ってくれるような模範的な利用者さんはいらる。僕らから見ると、そういう人には悪い気持ちにはならないし、優等生的な目で見ています。その人の立場からすると、眠い時も、つらい時も、「ありがとね」と言い続けなければいけない立場にあるということが辛いんだ、と

いうことに全然気づかなかった自分がいた。「何がソーシャルワークだったんだろう？」と思ひ知らされた体験が自分の中の原点回想だと思ふ。

娘の思いは、施設に入っても気持ちが萎縮してしまうことなく、自分の意見が言える環境を築いてあげてほしい、ということをやっているのだと思う。

司会 それらの体験からどのような行動の変化がありましたか？

施設の優等生的な利用者さんに、「いつも『ありがとね』など返してくれるけど、本当は辛いのは？」と聞いたことがある。また、職員へもその体験談を伝えてきたと思う。利用者から感謝されたり、思いを伝えられたりすると、職員のやりがいにつながる。そこは否定しないが、プロはもう一歩踏み込んで考えてほしいなと話の中に盛り込むことがある。

K氏 面倒くさいことが好き。「生理的に嫌いな人とは無理に付き合う必要がない」と言われたことがある。相談業務って面倒くさい。

感謝されることもあまりないし、でもなんか、好きなんですよね。介護している家族に寄り添いたい。ストレス、罪悪感、孤独感などで心がキューっとなっているご家族は多々見受けられる。支援者の立場では、そういう人を見つけて、見つめる視点が大事なな思いながら、暮らしている。

司会 地域包括支援センターって、大きな問題が氷山の一角として、見えたりする機会が多くあるので、キューっとなっている人に出会える場面も多々あるのでは？

K氏 援助者である自分自身が利用者さんをキューっとなさせていることもあるかもしれない。それを自覚することも大事だと思う。

司会 久しぶりに援助者としての原点についてみなさんと語り合いましたが、と共感できたり、仲間の話を聞いて、改めて自分の援助感を見つめなおす機会になったりと貴重な時間になりました。

Zoomインタビュー NGOアドラ 被災地支援

一二月二〇日、熊本と千葉をZoomでつなぎ、国際NGOアドラ・ジャパンの小出一博氏に、広報部会員がインタビューしました。



(写真左上) 広報部会員山口利史
(写真右上) 広報部会員大橋美和
(写真下) 小出一博氏

小出氏は、二〇一九年九月の台風十五号、十九号の後、被災地となった鋸南町で災害ボランティアセンター立ち上げ時から運営ス

ップとして活躍。常時、さらに長期に渡って、技術系ボランティアの調整の中心的な役割を担い、さらに地元のボランティアによる団体立ち上げをサポート。今は、熊本で被災地支援を行っています。

(広報部会員) アドラ・ジャパンとは、どんな活動をしている団体ですか。また、鋸南町で災害ボランティアが立ち上がったとき、どういった経緯で参加することになったのですか？

アドラ・ジャパンは途上国や災害被災地において開発支援や緊急支援活動を行う国際NGOです。

私は台風が発生した九月九日、東京にいました。木更津に自宅があるので、十一日に車で千葉に向かい、調査のため千葉を南下し鴨川市、南房総市、鋸南町を回りました。当時の町役場は災害ボランティア開設直前で混迷していました。そのときはまだ週末に鴨川市に物資支援に赴くに留まっていたので

すが、十五日夕方に鋸南災害ボランティアで職員が憔悴している様子を見て、「これは尋常ではない」と何人かに声をかけて参加することになりました。

参加当初はニーズ班に参加しましたが、一般と屋根の案件が混在していたため、屋根案件を引き受け技術系ボランティアと協働することになりました。

(広報部会員) 一緒に活動した災害ボランティアの立ち上げ時、台風被害はひどく、既に依頼が非常に多く、その中で一般のボランティアでは危険を伴い受けられないニーズがあふれていました。

また、全国から集まるボランティアの中にも屋根修繕ができる技術を持った方たちがいました。そこで、ネットワークになったのは、調整に必要なノウハウを持ち、かつ常駐できるスタッフのマンパワーがあるのかということでした。その時、小出さんが「もう僕、腹決めた。ずっとここにいますから」と、ブルーシートでの屋根修復の講習を受け、平日を含め継続的に担っていくと話されたとき、大変心強かったのと同時に、自由に動けることに驚きまし

た。どのような仕組みで小出さんは常駐できるようになったのですか？

アドラの国内事業部は出たとこ勝負のようなどころがあつて、現地にニーズを拾いに行き、アドラが出来ることを見出して、そこに入るというスタンスでいます。通常は数日間の調査ですが、今回は鋸南町に入らなければと即決し、団体に掛け合い、理解を得て活動しました。振り返れば、鋸南町のニーズのマッチングはカオス状態だったと思います。あれを経験し、ニーズの作業フローを整理しておきたいとの思いが強くなりました。南房総市、鴨川市も、共通の思いだったと思います。

(広報部会員) 現在の活動本拠地はどこになるのですか？

千葉県での活動については、私はいま引いています。現地に赴くのは、二〇二〇年三月頃は週二、三回に数を減らし、七月頃は週一、二回顔を出しました。地元の人たちが中心の技術系集団に育ち、随時必要に応じてアドバイス

するような形で鋸南町の支援に携わっています。

そして今は、熊本県にいます。

二〇二〇年七月の豪雨被害で、アドラの関係者から人吉市の状況を聞き、八月に遠隔では見えない状況を現地確認するために調査に入りました。そこで人吉市の大変さを知り、コロナで県外団体が入れない中で、三団体合同プロジェクトを立ち上げ助成金を得て、九月から参加するに至りました。当初は、東京からリモートで遠隔支援の予定でしたが、遠隔で事業を立ち上げることは難しく、ある程度現地の事をよく知る必要があると考え、十一月から現地に入っています。

（広報部会員）技術系ボランティアのネットワークづくりや、災害ケースマネジメントにどのようなイメージを持っていますか？

障がいや歩行困難のある五十代の方への支援を経験しました。被災して二階の屋根が破損。自衛隊が初期補修しましたが、雨漏りするようになり、二次的に支援に入

りました。修繕後も定期的に気にかけて訪問しました。雨で床がボコボコになり歩きにくいと言っているし、ブルーシートで修繕したものの今後はどうするのか？という話になりました。本当は修理をしたいけど、金銭面の不安があるので、公費解体するつもりだと。しかしその後、屋内清掃チームが家を綺麗にしてくれて、住めるなら住みたいと思うようになりました。住むなら直さないといいませんが、障害もあり、修理の見積もりをとったりアクティブに動けなかったため、工務店の知り合いの話をしたところ、当人も以前に修理を頼んだことがある店だったので、市の福祉課とも情報交換し、経済状況なども踏まえ話を進めることができました。

後になって、行政もこの方への支援について考えていましたが、はっきりと言葉で本人の意思を確認して、先を見通していなかったことがわかり、図らずもケースマネジメントとなりました。ボラセンと住民だけではなく、行政や福

祉サービス等と総合的に動かないと生活の再計画は難しいと感じました。制度のことはいくら勉強していても付け焼刃で追いつかないので、災害時のマネジメントは、技術系ボランティアと同じかそれ以上の割合で柔軟に生活再建をアドバイスできる人が増えないといけないし、もつとそのことが認知されないといけないと強く思いました。

（広報部会員）行政だけでは引き出せなかった本人の思いや選択肢を増やしてくれたのは、災害ボラがいたからですね。そこを繋げることができる人がいるか否かで、当事者の選択肢に大きく影響しますね。行政が動けない部分を動くことが出来る柔軟性は、民間の力かもしれませんね。

以前、リウマチのある女性の自宅に、隣の空き家の柱が倒れかけたケースがありました。空き家問題として行政も把握しており、行政文書で通知もし、問題があると認識していましたが、行政もこれ以上は動けないケースでした。

登記簿を調べて、他県にいる家主の娘さんに会うことができました。柱が隣家に寄りかかっている困っていると伝えると、気にはなっていたが金銭的な問題と親族間の相続の関係で話を進められていなかったことが分かりました。その後、定期的に連絡をとり進捗を確認しながらも、親族間の調整がなかなか進まなかった状況の中、重機のリース代のみという費用で解体を請け負うと言ってくれる人が現れたことで状況が一転。今後のリスクも考慮し話をしたところ、解体に至ることになりました。行政にも進捗を報告し、理解を得ながら話を進めることができました。このように、技術系以外の問題も関わる案件は、災害後も長く残る問題かもしれません。

（広報部会員）私たちソーシャルワーカーが学べき話を伺わせていただきました。お忙しい中、快くインタビューをお引き受けくださり、ありがとうございました。

社会福祉士のわ

白井市地域包括支援センター

鈴木智子（すずきともこ）



同じ地域で働く社会福祉士の同志、櫻田さんからバトンを受け継ぎました。良い機会をいただいたので、自分と福祉の関わりについて振り返ってみたいと思います。

地域共生社会の理念においては、支援の「支え手」・「受け手」という関係を固定せず、支援の必要な人を含め誰もが役割を持つということが提唱されています。私は東北の農村地域で育ちましたが、両親は聴覚障害、ひとりっ子という世帯でした。両親は、父がろう学校で技術を学んだ写真植字・印刷業を自営し、周囲の「心配」と闘いながら、強い自立心をもって必

死に育ててくれました。幼少期の私は言葉や行動が遅く、様々な点において我が家は、支援の必要な「受け手」側の世帯でした（今も手元に、保育園の先生が私を心配して両親に寄せた手紙が残っています）。私自身、周囲に心配される存在であることを感じながら暮らしていましたが、転居による環境変化、中学・高校での経験をふまえ、少しずつ変わっていききました。

大学では心理学・社会学を専攻し、公務員を志望したのですが、就活時は心理職の募集がなく、岩手県福祉職で採用となりました。最初の二年は県庁で児童関係の事務、次の二年は児童相談所勤務でした。県庁時代、激務の中で認可外保育施設を訪ねた時、子ども達がその日のために練習したという踊りを見せてくれたこと、児童手当の拡充に取り組んだこと、児童相談所で十分な対応ができず、未熟さを痛感したこと。色々な思い出があります。個性的・魅力的な先輩が何人もいて、若い私に暖かくご指導くださったことを、あり

がたく思い出します。結婚により四年で退職し千葉県に転居。二年間専業主婦でしたが、専業主婦には向いてない！と気付き、現在の勤務先である白井市に就職しました。児童関係の事務、家庭児童相談室などを経て、平成十八年度から地域包括支援センターに所属しています（社会福祉士資格は平成十四年に取得）。市職員になり、地域に暮らす様々な方と日々関わるようになって、福祉現場の最前線にいると実感し、県と異なるやりがいを感じています。

四〇歳代半ばを過ぎてから、社会福祉学を学ぶため修士・博士後期課程に在籍し、今も仕事と研究の両立に苦闘しています。ソーシャルワーカーや大学院生として頑張っていることを保育園や小学校時代の先生が知ったら、どんなに喜んでくださるだろうかと思えます。人はいくつになっても成長でき、どんな立場にあっても変わることができ。一方、人は全てにおいて「支え手」側であるはずもなく、私自身今も多様な支援を受

けているし、今後、さらに大きく「受け手」側になることもあるだろうと思っています。自分の人生を振り返ってみても、「支え手」「受け手」の関係を固定しないって当たり前と思いつつ、ソーシャルワーカーとして「支え手」心理に偏っていないか、困難を抱えつつ懸命に生きる方への敬意を失っていないか、と省みるこの頃です。

コロナ禍に求められるリーダーとは

我孫子市役所社会福祉課

鈴木 将人

『俺は俺の責務を全うする!!』

何が起るかわからないコロナ禍の渦中にあつては、福祉の現場にいる職員は何をなすにしても迷わざるを得ない。「新しい生活」の名の下に、これまでの当たり前を否定することも少なくない。こんな時、求められるのは確かなリーダーである。

説明の必要もないかもしれないが、冒頭のセリフは今年、映画史を塗り替えるほどのヒットとなった映画の主要人物のものである。彼は作中、突如始まった混乱に際して極めて冷静に状況を分析し、彼の部下に対して素早く的確な指示を出す。ここで私が感心したのは二つのこと。一つは、一人ひとりの力量を見極め、適材適所の役割を与えつつ、「あなたの力を必要としている」

というメッセージをきちんと伝えていたこと。もう一つは、かなり深刻な事態になっても決して焦ることなく、口元には笑みをたたえているほど余裕がある(ように見せている)こと。

不安を抱えた部下達は、自分が寄つて立つ頼るべき柱が頑強であり、かつ泰然としているのを見て精神的な余裕を取り戻す。また、「これでいいのだろうか」と悩みながら取り組んでいることに対し、「この範囲でいい」「こうすればより良い」と簡潔かつ的確な指示があれば自信を持つてその責務を全う出来る。自らが統率するすべてのメンバーがその責務を全うできるよう導くこと。それが求められるリーダーの責務であり、その責務を全うできるリーダーに、私もなりたい。

こ ら む

『あれも言いたいこれも言いたい』

「苦情から縁が結ばれる」とは、「顧客からの不満を丁寧な扱い、原因をつかむとともに誠心誠意対処すれば、誠意が通じ、かえって縁が結ばれる」意味であり、経営の神様と呼ばれた先人の教えである。

【キャッシュレス決済とレジ袋】

多くの店で普及しているキャッシュレス決済。そして私はレジ袋をもらう派だ。なぜって？左手にスマホ(バーコード決済)、右手にポイントカード。この時点で両手がふさがっている。家計簿のためレシートもらうのにもう1本。レシートを入れる財布を開くのもう1本。もう手が4本必要になる忙しさ。だからレジ袋を購入して、店員に袋に入れてもらう時間を稼ぐ必要がある。カゴを置いた瞬間から全集中・機械の呼吸・老の型・バーコード読み取りの構え。私のようにできる男は店員に聞かれる前に「レジ袋ください」と言っちゃうね。「小(二円)・中(三元)・大(五元)どれにしますか?」、「(焦りながら)あ、あ、あ、じゃあ中

で」、「お客様、中では入りきらないかと・・・」こんな悲劇が生まれているよ。もうレジ袋をいらない人が申告する仕組みに変えてもらえませんか?

【オンライン会議に棲む魔物】

リモート会議の参加も増えた。自己紹介の時間。つかみに笑いを入れてみようか。私が話す時は他の人はミュートなので、静まり返った部屋の中で40過ぎたおっさんがパソコンの前で自虐ネタを披露・・・何コレ、超怖いんですけど。もうね、足が震えちゃう。反応見ながら話すタイプには本当に怖いよ。昔ドリフでよく聞いた「おばちゃんの笑い声機能」実装してくれませんかね?

【ガソリンスタンドと給油】

給油機に向かって右側がレギュラーってすごく多い。でも車の給油口って左後方が多くない? 6人乗りとか大きい車だとホースが届かないから駐車枠より前にはみ出して停める。後から来た車は、私が見出てるから、やっぱり前にはみ出て停める。給油機のレギュラー給油口は向かって左に配置してくれませんか?

長い冬が終わり、待ちに待った春が来ました。みなさまいかがお過ごしでしょうか。年度末や年度初めの準備でお忙しい日々をお過ごしのことと思います。少しでも状況が改善され当たり前の日常生活が送れますように。新型コロナウイルス感染症の一日も早い収束と、1年遅れの東京オリンピック、パラリンピックが無事に開催されることを願っています。季節の変わり目は体調を崩しやすくなります。くれぐれもご自愛ください。

研 修 等 ・ 行 事 の お 知 ら せ

※4月以降、順次開催研修の申込案内をホームページに随時掲載致します。

また、研修等が新たに決定した際にはホームページに随時掲載いたします。是非チェックしてください。

千葉県社会福祉士会ホームページ：<http://www.cswchiba.com/>

【以下、新年度研修予定】

- ・研修委員会-基礎研修Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、実習指導者講習会他
- ・権利擁護センターぱあとなあ千葉運営委員会- 必須登録員研修、レベルアップ研修、成年後見活用講座、ぱあとなあ千葉サポート、テーマ別弁護士との事例検討他
- ・司法福祉委員会-刑事司法ソーシャルワークの実務（基礎編）、（応用編）

※新型コロナウイルスの感染拡大の状況によっては、開催を中止・延期する場合があります。

会 員 の 皆 様 へ お 願 い

- ・【重要】2021年度年会費引落のお知らせ

年会費 15,000 円と引落手数料 121 円の合計 15,121 円を 2021年4月12日（月）にご指定の口座より引落させていただきますので残高不足等がないようにご確認をお願いいたします。

- ・お名前・ご住所・電話 FAX 番号・お勤め先等が変更となった場合、変更届の提出が必要です。ご不明の点は事務局までお気軽にご連絡ください。

ようこそ！千葉県社会福祉士会へ

氏名	居住地	勤務先	氏名	居住地	勤務先
笹月 亜紀子	千葉市	千葉市教育委員会	堀田 誠	船橋市	江東区役所
溝口 寿子	松戸市	松戸市役所	高野 かおり	—	—

正会員登録書「点と線掲載の可否」の項目で、可に○を頂いている方のみ掲載しております。（順不同・敬称省略）

令和3年1月4日現在の会員数

正会員 1,511名、 準会員 6名、 賛助会員 2名 合計 1,519名